

Jinakālamālī における竄入文について

古 山 健 一

1. はじめに

Wat Pā Dāng 派⁽¹⁾ は、A.D.15c 前半にラーン・ナー王国において新たに出現した僧派であるが、同派の歴史を編述したパーリ語文献 *Jinakālamālī* (A.D.1527年完成。※以下 Jkm と略記)⁽²⁾ には、その第24章の中に、かの George Coëdès が竄入と見做した1文がある。本稿は、この1文が「竄入」と断ぜられるのか否かについて、一考を加えるものである。以て、この論集に寄稿してきた Jkm 及び Wat Pā Dāng 派に関する筆者(古山)の論考〔古山2017.及び古山2019.~2022.〕の補完としたい。至らぬ点は多々あると思うが、Jkm 及びラーン・ナー仏教史の理解を深めるのに多少なりとも役立つことができるならば幸いである。筆者の不学なるところについては識者諸賢のご批判とご叱正を乞いたい。

2. 竄入説について

Jkm の第24章“Mahādhātucetiya-kathā (大舍利塔の話)” [Jkm, pp.95-96 ; Cf. Jkm-tr[J/E], pp.133-136] の中には、Sakkarāja 暦(※以下 C.S. と表記) 809年 (A.D.1447年) に始まった Mahādhātu-cetiya⁽³⁾ の改修・拡張工事の語りがある。その語りの中に〈Sakarāja 暦の同年、Arimaddana-pura (※ミャンマー・パガン) において、Chappada 阿闍梨が *Saṅkhepavaṇṇanā* を著した〉 [Jkm, p.96 ; Cf. Jkm-tr[J/E], p.135]⁽⁴⁾ という文が現れる。

なお、この文中における〈Sakarāja 暦 (Sakarāja=C.S.) の同年〉であるが、A.D.1448年を指しているのではないかと考える。工事は Sakarāja 暦の卯年 (sasa, C.S.809 = A.D.1947年) に始まり、まず仏塔基壇が造り直された。次いで、Māgha 月の黒分布薩の日に吉祥バリ儀礼が執行されて、仏塔本体の改修・拡張工事へと進んだ。この工事は Visākha 月に完了したとされる。ここに言われる Māgha 月は、A.D.1448年の第5月 [Jkm-tr[J/E], p.135 footnote2: Jkm-Ind, p.253] と、Visākha 月は A.D.1448年の第8月 [Jkm-Ind,

p.253] と、それぞれ解されている。第 8 月の時点では Sakkarāja 暦は 810 年に改まっているであろう。仏塔本体の工事が終わった直後には、仏塔の周囲に煉瓦と石を積み守護壁が建設された。この守護壁建設も A.D.1448 年と考えられる。この守護壁工事の話の直後に、上引の文があり、その冒頭で〈Sakarāja 暦の同年〉と述べているのであるから、Hans Penth はなぜか A.D.1447 年と述べている [Jkm-Ind. p.139] のであるが、これは C.S.810 年 = A.D.1448 年を指すと考えるのが合理的であろう。

さて、上引の 1 文であるが、Cœdès はこれを明らかな竄入である (*Cette phrase est une interpolation manifeste*) と述べている。Cœdès はその理由として、まず、無関係な話を差し込む理由もないのに話の流れを遮っている、と言う。また、ここに言及される“Chappada” (※史資料により“Chapaṭa”や“Chappaṭa”、“Chapada”、“Chappada”などと表記に揺れがあるが、以下本稿では訳文以外のところでは“Chappada”に表記を統一する) という名の学僧をミャンマーのカルヤーニー碑文 [Cf. Kalyani-Isc. pp.4ff.] に現れる、A.D.12c にスリランカに留学した同名のミャンマー僧と同一人物であると見做したことから、A.D.15c の出来事の中に言及していることを問題視している。Cœdès は、自らの Jkm フランス語訳に斯様な註記⁽⁵⁾をほどこすとともに [Jkm-tr[C/F]. p.109 *footnote (1)*], 同氏が校訂しローマ字に翻字した原典テキスト (PTS 版第 19 章以降に相当する抄出テキスト) では当該の文を丸括弧で括り [Jkm-tr[C/P]. p.52]、本文からは格下げした扱いにし、訳文は与えていない。

A.P. Buddhadatta が校訂して A.D.1962 年に PTS から刊行した Jkm [Jkm.] においては当該の 1 文を Cœdès のように括弧で括るようなことはしていないが、A.D.1968 年に出された N.A.Jayawickrama によるこれの英訳 [Jkm-tr[J/E]] では、この 1 文の訳文に註記を付して、上述した Cœdès のフランス語訳における註記を紹介している (pp.135-136 *footnote6*)。Jayawickrama は Cœdès の見解には異を唱えていないため、同氏の竄入説を支持しているように見える。

A.D.1994 年に上梓された Hans Penth による Jkm の索引 [Jkm-Ind.] では、その前書きにおける Jkm のテキストの問題を論ずる箇所でのこの 1 文のことに言及し、〈…有名なビルマの僧にして著者である Chappada は A.D.1150 年頃に生きていたのであるから、これは明らかに、場違いで不正な、後世の竄入 (*a later interpolation*) である〉(p.xi) と述べている。また、同索引の“Pagan”の項の中では、先述した Cœdès の註記を示した上で、この 1 文を〈…疑いなく本文における後世の竄入である〉云々と述べている (pp.139-140)。Hans Penth は Cœdès の見解を踏襲している。

Jkm 第24章における上引の文を Coedès が「竄入」と考えた理由の1つは、この1文がその文脈とは無関係なもの (*une absurdité*) であるという点にある。確かにこの文の内容は、“Mahādhātu-cetiya”の工事の次第とは関係ない。しかしながら、唐突の感が否めないかたちで現れる文ではあっても、そこにあって決して場違いなものではないと考えることがまったく無理ではないならば、一定の合理性は認められるのであり、馬鹿げた話であると一蹴することはできないのではないと思う。この点については後に第4節で論ずることとする。

また、Coedès がこれを「竄入」と考えたいま1つの理由は、その文中に現れる“Chappada”という名の人物がA.D.12cの半ば頃に活躍した僧に違いなく、この僧が *Saṅkhepavaṇṇanā* (*Abhidhammatthasaṅgaha* の註疏の1つ。※以下SVと略記) を著作したとする語りが、A.D.15c半ば頃の出来事を語る中で同時期の出来事として挿入されているというところにある。時代が合わない、という不合理を指摘しているわけである。しかしながら、SVの著者である“Chappada”がA.D.15c半ば頃にいたということになれば話は変わる。この点については次節において論じたい。

先走りして筆者(古山)の結論を述べると、Jkm 第24章における当該の1文について、竄入の可能性は完全に排除できないけれども、Coedès が示す竄入説の理由は決定的な理由とはなりえないのではないかと考えている。この1文を〔後世の〕竄入と断定するには、さらに別の理由が示されなければならないであろう、というのが筆者の見解である。

3. Chappada 二人説について

ミャンマーにおいてはSVをA.D.12cのChappadaによる著作と見做す説があった。他の可能性を排してSVの著者をこのChappadaと断ずるのは、目下の筆者(古山)の知る限りでは、A.D.19c前半期にミャンマーで編まれた『ターダナーリンガーヤサーダン』(အထွေထွေအဘိဓာန်၊ ビルマ語。※以下Sāslcと略記)ではなからうかと思う。

なお、Sāslcよりも古い *Gandhavaṃsa* (※A.D.16c頃)での言及箇所 [GPL.p.24, pp.34-35; Cf 片山1974. p.124, pp.114-113]を見ると、SV及び *Kaccāyana-suttaniddesa* (*Kaccāyana-vyākaraṇa* の註釈書の1つ、※以下KSNと略記) [を含む8書]の著者名は“Saddhammajotipāla”と述べられ、著作年への言及はないが、A.D.14c頃のあたりに位置付けているようで

ある [Cf. 片山1974, p.75 (※片山一良はA.D.12cの作と記しているが)]。また、SVはスリランカにおいて閻浮主Parakkhamabāhuの要請により著され、KSNはバガン(Pukkāmanagara)において自身の弟子の要請により著された、と述べられている。ここでは著者をカルヤーニー碑文に出るChappadaと結びつけるような話は見出されない。

話を戻すと、Sāslcには次のような論述がある。

…Uttarājīva大長老とChappada師がシーハラへ渡ったのは仏暦1715年(※A.D.1171年)、シーハラからChappada師が帰ったのは仏暦1725年(※A.D.1181年)、このようにカルヤーニー碑文や諸々の王統史(ရာဇဝင်ရာဇဝင်)に出ているのを集めるべきである。Suttaniddesa、*Sāṅkhepavaṇṇanā*等の先述の書の奥付(နိဂုံး)には、“puṇṇe navanavutiguṇe ca vasse vasse saḥassaguṇe jinanibbutamhā”と、「シーハラに渡りシーハラから到着したのが仏暦…」という、2つのことが述べられていることとは相応しく調和するように、熟考し尽くしている。[Sāslc, p.119; Cf. 池田2007, pp.185-186⁽⁶⁾]

このようにSāslcは、SVの著者をカルヤーニー碑文に登場するA.D.12cのChappadaと同一視する。SVとKSNの奥付には、“puṇṇe dase navanavutiguṇe ca vasse, vasse saḥassaguṇe jinanibbutamhā”との年記があるが、これは「仏滅後1990年(A.D.1446年)」と読むのが正解⁽⁷⁾であろう[Cf. Buddhadatta1951, p.74 footnote11; Ruiz-Falqués2015, p.4]。しかしながら、Sāslcは、恐らくは池田2007.の訳文中にも見られる「仏滅後1810年(A.D.1266年)」のような解し方をして、つまり、なるべくA.D.12cに近くし年代的な齟齬をきたさないような読み方をして、上記2書の著者がカルヤーニー碑文に言及されるA.D.12cのChappadaであると断じているのである⁽⁸⁾。牽強付会の感が否めないだろう。

Sāslcを下地資料にしつつA.D.19c中頃に編まれた*Sāsanavaṃsa* (パーリ語。※以下Sāsと略記)では、SVとKSN〔を含む5書〕の著者をスリランカ渡航経験のあるSaddhammajotipālaとし、Arimaddana-nagara (バガン)においてこれらを著したと述べている。また、この比丘は、Kusima-nagara (パティン)のChapada村で生まれたことから、“Chapada”という名で広く知られている、とも述べている [Sās, p.74; Cf. 生野1980, p.154]。SVなどの著者が通名として“Chapada”と呼ばれていた所以は、Sāslcの語るところ [Sāslc, pp.118-119; Cf. 池田2007, p.185] と同じであり、これはカルヤーニー碑文の情報に基づくものであろうが⁽⁹⁾、この点にお

いてA.D.12cのChappadaとの同一性を暗に匂わせるかたちにはなっている⁽¹⁰⁾。なお、Sās1cにはあったSVとKSNの奥付にある年記についての言及は、Sāsでは触れられなくなっている。

このSāsよりも少し後のA.D.19c末頃に編まれた『ピタカットータマイン』(ပိတောက်တိုင်း၊ ビルマ語。※以下Piṭakaと略記)は、SVはSaddhammajotipālaがバガンで著した、と述べている [Piṭaka. No.308 ; Cf. Piṭaka-Tr. No.307]。また、KSNについては、著者名についてSaddhammajotipālaとしつつ、この比丘はミャンマー・パテインのChapada村 (ဆာပတင်) の出身であることから“Chapada (ဆာပတင်、※ビルマ語の読みは「サバダ」)”とも呼ばれていたと述べ、スリランカから戻った後にバガンで本書を著したとしている [Piṭaka. No.382 ; Cf. Piṭaka-Tr. No.381]。著者が“Chapada”と呼ばれていた所以については、Sās1cやSāsの語りを踏襲しているようで、やはりA.D.12cのChappadaとの同一性を暗示するかたちになっている。

ミャンマーでは、もしかするといま少し遡れるかもしれないが、少なくともSās1c以降、SVやKSNはA.D.12cのChappadaの著作であると見做す見解が通説的になっていったようである。初版がA.D.1909年に出版された、かのM.H.Bodeの名著*The Pali Literature of Burma*では、SVやKSNの著者を、カルヤーニー碑文に登場する、Uttarājīvaの弟子ChappadaことSaddhammajotipālaとして論じており [PLB. pp.17-20]、その影響力の大きさのゆえか、以後も斯様に述べる人は多いようである。

Cœdèsは、Jkmのローマ字テキストとフランス語訳をA.D.1925年のBEFEO誌に公表しているのであるが、同氏が、SVの著者をA.D.12cの僧と考へ、〈かの有名なChapadaは、ここで報告されている出来事の数世紀前に生きていた (*Le célèbre Chapada vivait plusieurs siècles avant les événements rapportés ici.*)〉と註記したのは、上述の状況があったがゆえかと思われる。そして、Jkm第24章中の1文を「竄入」と見做す判断材料としたわけである。

ところで、ごく最近のことであるが、筆者(古山)はAleix Ruiz-Falquésの大部な論文 [Ruiz-Falqués2015.] を読む機会に恵まれた。そしてそこで、“Chappada”という名の僧はA.D.12cのほかにもA.D.15cにもおり、しかも、SVやKSNなどを著したのは後者のChappadaと見るべきであるとの説を、まことに不勉強ながら、初めて知ることになったのであった。

この「Chappada二人説」とでも呼ぶべき説が最初に唱えられたのは、PTS版

Jkmの校訂者でもあるA.P. BuddhadattaがA.D.1951年⁽¹¹⁾に公表した‘*Were There Two Elders by the name of Chappada?*’と題する所論 [Buddhadatta1951.] においてであった。ここで重要と考える点だけを抽出すると、同論文では以下のことが指摘された。

- (1) カルヤーニー碑文にはChappadaの諸活動については長々と説明しているけれど、Chappadaの著作への言及がない (p.71)。
- (2) SV末部にある奥付の4偈⁽¹²⁾には、Chappadaが仏滅後1990年にミャンマー・バガンからスリランカへ渡り、Parakkamabāhu王の支援により“pura-vara”であるJayavaḍḍana-pura即ちKotteの結界を浄化したことが述べられている (pp.71-72)。ゆえに、このParakkamabāhu王とは6世を指す (p.72)。(※ A.D.12cの段階ではKotteは“pura-vara”と呼ばれるような都になっていなかったはずである)
- (3) SV中の結文⁽¹³⁾によると、同書の著者であるこの“Chappada”の正式な僧名は“Saddhammajotipāla”であるが、カルヤーニー碑文に登場するChappadaには“Saddhammajotipāla”と呼ばれていたことを示す証左がない (p.72)。
- (4) SVの序偈に著述動機を述べた箇所⁽¹⁴⁾があるが、そこにおいて言及されるSVの述作を要請した“Mahāvijayabāhu”なる人物は、当時あったMahāvijayabāhu Pariveṇaの長のことであり、後に僧団王となるRāhula長老を指す (p.73)。(※ Mahāvijayabāhu王を指してはいない。また、*Gandhavaṃsa*が述べる、閻浮主Parakkhamabāhuの要請により著されたというのは誤りとなる)

以上に列挙した諸点のみで、十分にSāślcの主張は退けられ、SVの著者がA.D.12cのChappadaではないことは証明されたと言えよう。

Buddhadattaの所論の後、1969年に、C.E. Godakumburaが‘*Chapada and Chapada Saddhammajotipāla*’と題する論文 [Godakumbura1969.] をJBRs誌上に公表し、Buddhadattaの議論を吟味・補完し、部分的に修正して、“Chappada”という名の僧には、カルヤーニー碑文に登場するA.D.12cの単なるChappadaと、A.D.15cにSVやKSNなどを著したChappada Saddhammajotipālaの2人がいることを論じた。

かくして「Chappada二人説」は確定的になったと言えるのであるが、Aleix Ruiz-Falqués [Ruiz-Falqués2015, p.4] によると、K.R.Normanの*Pāli Literature* [Norman1983.]

やO. H. Pindの論文など比較的最近の権威ある出版物にも混乱が見られる、とのことである。恥ずかしながら告白すると、筆者は以前の拙稿〔古山2022.〕において、KSNをA.D.14c末のセーンムアンマー王時代の僧たちが学んだ可能性があるなどという、今考えれば実に迂闊な註記をほどこしてしまった(p.212註(10))。かつて熱心に読んだBodeの本から得た知識のまま、SVもKSNもその著者はA.D.12cのChappadaであると理解していたからであるが、これは間違いであることを認めなければならない。セーンムアンマー王時代の僧たちが、KSNを学んだ可能性はなかったと見るべきである。

蛇足ながら付言すると、KSNには、同書の著者が参照していた先行するパーリ文学の書への言及が随所に確認されるが〔Cf. Ruiz-Falqués2015. pp.33-35〕、そうした書の1つに*Bālāvatāra*がある。筆者が目下把握しているところでは、この書名を挙げる箇所が計9箇所(*Kaccāyana-vyākaraṇa* No.276、279、284、301、306、309、315、316、346の各註釈部)ある。*Bālāvatāra*は、著者・年代ともに不詳とのことであるが、A.D.14cのMahāsāmi Dhammakitti IあるいはDhammakitti IIともされる、とのことである〔橋堂1997. p.39〕。もし*Bālāvatāra*がA.D.14cの著述であるならば、KSNがA.D.12cに著されたと考えることは無理である。

さて、SVが仏滅後1990年(A.D.1446年)にスリランカへ渡航したChappadaの著作であるならば、A.D.1448年にChappada阿闍梨がSVを著したことを述べるJkm第24章の1文は、SVの年代と比較的近い時期に成った*Gandhavaṃsa*において述作地をスリランカと述べている〔GPL.p.35; Cf. 片山1974. p.113〕ので、その情報のすべてが正確であるかどうかは別として、少なくとも年代の合わない不合理な話を挿入しているのではないということになる。Jkmでは正しく言及されているのである〔Cf.MSS-B. p.42〕。A.D.1446年にスリランカへ渡った比丘がA.D.1448年にスリランカであれバガンであれSVを書くことは十分に可能である。となれば、Cœdèsの竄入説における理由の1つは然程確実ではなくなる。

4. 「竄入」と断じ切れるか？

Cœdèsが「竄入」と断じたJkm第24章における当該の1文であるが、上述したとおり、これは年代の合わない不合理な話をしているのではない。とは言うものの、それは、Mahādhātu-cetiyaの工事について語っている話の流れの中で、これを唐突に遮るかのようなかたちで現れている如く見える。かるがゆえに、

この1文の内容についてその前後の脈絡とは無関係との印象をいだいたとしても、それなりに理解はできる。

しかしながら、改めて Jkm 第24章の当該箇所 [Jkm. p.96 ; Cf. Jkm-tr[J/E]. pp.135-136] を注意深く見てみると、Cœdès が言うほど、当該の1文は話の流れを遮ってはいないように思える。この1文の直前の文章では、A.D.1448年 (C.S.810年) の第8月 (※本稿第2節を見よ) に仏塔本体の工事 (※縦横52ラタナ、高さ92ラタナの尖塔型に改修・拡張) が終わった直後、仏塔の周囲に煉瓦と石を積み守護壁を建設したことが語られている。そして、この1文の直後の文章では、〈また、Sakarāja 暦の卯年 (C.S.809年)、その *cetiya* の漆喰工事が終わると〉と述べて、ティローカラート王が自身の師である Medhañkara (※ Wat Pā Dāng 派の僧長であり、この工事の吉祥バリ儀礼を執行した長老) への灌頂と “*Atulasaktyādhikaraṇa-mahāsāmi*” との諡号を授与した儀礼のことが語られている。

当該の1文は、仏塔の守護壁建設と漆喰工事という一連の工事の流れの話を分断して挿入されているように見えるのであるが、実はそうではない。守護壁建設の話は C.S.810年のことであり、漆喰工事と Medhañkara への灌頂儀礼の話は Sakarāja 暦の卯年すなわち C.S.809年のことである。守護壁建設と漆喰工事は、前者が後で、後者が前なのである。この2つの出来事の話には時間軸上を順送りに進む流れはないのである。守護壁建設の話のところ、建設工事の話はそもそも途切れている。

Cœdès は、この1文について語りの糸を遮断している (*interrompt ... le fil du récit*) と言うが、当該文の前後の語りの内容は時系列を異にするものであり、両者の間にはかかる意味での分断がそもそも存在するのである。この1文は、これを書いた人が、Chappada による SV の述作を C.S.810年 (A.D.1448年) と〔正しく〕理解していたため、C.S.810年の出来事を語る話の末部において、そのことに触れたに過ぎないのではないか。ゆえに、この1文がここにあること自体については、不自然さはなく、場違いでもないように思うのである。

Cœdès が「語りの糸を遮断している」と言うとき、そこには「理由もなく (*sans raison*)」という言葉が添えられるのであるが、それでは、Chappada のことに触れる当該の1文が書かれたことについて、「理由」と言うものはまったく考えられないのであろうか。

筆者 (古山) は、少なくとも気まぐれの類で書いたとは思わない。そして、この Jkm 第24章の1文を、Chappada の著述活動を Wat Pā Dāng 派として称揚す

るために書かれたものなのではなからうかと考えている。Chappada のSVが、Jkmが完成したA.D.1527年頃までに、Wat Pā Dāng 派内においてアビダンマの学習・研究の面で非常に重要視されていて、そのためJkmの作者はSVの述作という出来事を特筆しておくべきと考えた、と想像してみることもできるが、SVに彼らが特段重要視しそうなアビダンマの教説があるのかどうか、目下の筆者には思いが巡らない。ゆえにひとまず、この1文は、ただSVにだけ焦点を当てて、その述作という出来事を記録しておくために書かれたのではないように思うのである。ちなみに、眼前のテキストに書かれていないことを本来は書いてあったなどと軽々に言うことは厳に慎まなければならないが、当該の1文においては、原テキストではKSNなど他の著作のことも語られていたのではないかとさえ思うほどである。Hans Penthが指摘するように、Jkmのテキストは伝写の過程で随所に欠落が起きたようであり、現存テキストを原テキストとは見做し難いようである [Jkm-Ind. pp.x-xii ; Cf.古山2017. p.325] から、強ちありえないことでもないかもしれない。

それはさておき当該の1文をChappadaの著述活動を称揚するために書かれたものと想定したとき、そこにはいかなる理由があると相応の根拠をもって想像することができるであろうか。

まず、後にWat Pā Dāng 派を築くことになった、DhammagambhīraやMedhañkaraを始めとするラーン・ナーの僧たちは、パーリ語の“*orthoepy*”の学習を、とりわけ僧団儀式などで朗誦されるパーリ語の字音 (akkhara) の矯正を目指して、スリランカに修学した (本稿註 (1) をも見よ)。Jkmの語りによれば、このラーン・ナーの僧に下カンボージャの僧を加えた33名は、スリランカにおいて、ミャンマー南部Rammana地方の住人である6名の大長老とともに、スリランカで行われているパーリ語の“*akkhara-paveṇi*” (字音体系の慣用) と、これに沿った“*pada-bhāṇa*” (誦) 及び“*sara-bhañña*” (誦) を学んだ [Jkm. pp.92-93 ; Cf. Jkm-trfJ/E]. pp.129-130]。A.D.15cのChappadaの伝記は不詳ではあるが、ChappadaがこのRammanaの大長老たちの関係者であり、ゆえにその著作活動に言及したと想像することは不可能ではない。

また、ラーン・ナーのスリランカ留学僧たちが、同時代にスリランカに渡り、ともにParakkamabāhu 6世王の厚誼を得て東南アジア地域の仏教興隆に繋がることを成し遂げたという点で、このChappadaに強い親近感をいだき、かつ敬意を有していたと想像することもできるだろう⁽¹⁵⁾。

しかし、Wat Pā Dāng 派の性格を踏まえた、多少なりともより蓋然性の高いかたちで別の想像を巡らすこともできるように思う。と言うのは、先述のとおり、Wat Pā Dāng 派というのは、パーリ語の字音 (akkhara) の矯正 (筆者はこれを「パーリ語改革」と呼ぶ) を目指してスリランカに修学したラーン・ナーの僧たちによって築かれた僧派であるからである。この点を外して Wat Pā Dāng 派のことを考えることはできないと思う。

Jkm には、セーンムアンマー王が、パーリ語文法学書 *Kaccāyana-vyākaraṇa* (※以下 KV と略記) の第 1 章 Sandhi-kappa と第 2 章 Nāma-kappa だけでもこれを学習する僧を四資具で奉仕したとし、この王のパーリ語学習奨励を称える語りがある [古山2022. p.237]。また、Wat Pā Dāng 版 *Mūlasāsanā* (ตำนานมูลศาสนา ฉบับวัดป่าแดง、北部タイ語。※以下 MS.CP と略記) には、留学僧のリーダーであった Ñāṇagambhīra が、沙弥として修学していた時期に、*Rūpasaddā*、*Bhedaniruttisaddā*、*Nayāḍhasaddā*、*Samuhanikhādahasaddā*⁽¹⁶⁾ を学んだことが述べられていた [古山2020. p.245]。同じく MS.CP では、彼ら留学僧が帰途に就く際に、スリランカの Mahāsudassana 長老から、スリランカにおけるパーリ語の字音体系の基礎である *Saddāsandhi*、*Nikhādanasaddā*、*Cintāmaṇī*、*Vuttisaddā*⁽¹⁷⁾ や *Kaccāyana-vyākaraṇa* の 41 字音の正しい発音に従うべきことなどを教誡されたことが語られている [古山2019. p.263]。このようなことから、Wat Pā Dāng 派の僧たちは KV をかなり重んじていたことが推定され、KV の根本則の如きものとしてその冒頭部分に示される “*attho akkharasaññāto* (意味は字音により知覚される)” (No.1、※以下 Kacc.1 と略記) という見解⁽¹⁸⁾ については、パーリ語の字音体系を重んずる彼らの思想面の支柱となっていたものと考えられる。

既述のとおり、A.D.15c に SV を著した Chappada は KSN をも著したとされる。KSN には、SV と殆ど同文の結文と奥付 (※仏暦 1990 年とするスリランカ渡航年の年記もあり) があるので [Cf. Kacc-nidd. pp.278-279]、両書が同じ作者の手に成るものであることは間違いなさであろう。そして、この KSN であるが、*Mukhamattadīpanī* (Nyāsa) など先行する KV の註釈書には確言されていなかった Kacc.1 を世尊直説とする説を初めて明確に述べたものと言われている [Cf. 渡邊2018. p.37-38註 8 ; 渡邊2019. pp.1092-1093]。それは以下の箇所である。

…字音と語句に巧みなことのうち、いずれに巧みであることが第一に実現されるべきか、との考えにおいて、字音に巧みであることが根本であることから、第一に字音に巧みで

あることが実現されるべきである、と示すべく、“*attho akkharasaññāto* (意味は字音により知覚される)”との文 (*vākhyā*) が言われたのである。その場合、“*attho akkharasaññāto*”というこれは、世尊の口誦 (*mukha-pāṭha*) から生じた前文 (*pubba-vākhyā*) であって、*Kaccāyana* によって言われた文ではない。と言うのも、ひとりの老いて出家した比丘が、世尊の面前で業処を学び、アノータッタ [池] のほとりにあるサーラ樹の根元に坐り、生・滅 (*udaya-vaya*) の業処をおこなったからである。彼は、水 (*udaka*) 面に動く青鷺 (*baka*) を見て、「水の青鷺 (*udaka-baka*)」という業処をおこなった。世尊は、それを間違いと見て、老いて出家した者を連れてこさせ、“*attho akkharasaññāto*”という文を言ったのである。*Kaccāyana* 長老もまた、世尊の意図を知って“*attho akkharasaññāto*”という文を前に置いてこの論書をつくった、という。…

[*Kacc-nidd.* pp.2-3]

本題からは脱線するが些か付言すると、O. H. Pind は、上引の語りについて、根本説一切有部の律で語られている物語と驚くべき類似点がある、と述べている [Pind1995. pp.284-285 *footnote11*]。『根本説一切有部毘奈耶雜事』にその物語はあり [大正蔵 vol.24, pp.409c-410a]、『阿育王経』の中にも同内容の話が見られる [大正蔵 vol.50, pp.154b-155a; Cf. 渡邊2019. p.1094註7] ⁽¹⁹⁾。『南海寄帰内法伝』 [大正蔵 vol.54, p.205a-b] などの文献資料のほか、ドゥヴァーラヴァティーで制作された五趣生死輪 (※ *Divya-avadāna* の記述に基づく図像とされる) のついた法輪などから、かつて東南アジア大陸部において根本説一切有部が存在していたことは確かであるが、この部派が東南アジア地域にもたらした仏教説話は、佐々木教悟がタイ演劇の「マノーラー」は *Divya-avadāna* の No.30 *Sudhanakumāra-avadāna* (※『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻第13-14にもあり) をもとにしたものであると指摘している [佐々木1979. pp.488-490] ように、当該地域がテラヴァーダ化された後にも、あるものは残り続けた。斯様な点に着目すると、A.D.15c の Chappada がこのような『根本説一切有部毘奈耶雜事』の物語を知っていて、これに着想を得て KSN における上引の話を設えたと考えられなくもないが、『根本説一切有部毘奈耶雜事』と KSN で共通しているのは、“*udaya-vaya* (Skt. *udaya-vyaya* : 生・滅)” が “*udaka-baka* (水白鶴、水白鷺)” になってしまったという箇所のみであるため、両者の間に「驚くべき類似点」と言うほどの類似があるのかどうか、筆者には疑問に思われる。A.D.15c の Chappada が、Wat Pā Dāng 派を築くことになった僧たちのように土着語訛したパーリ語のことを問題視し、『根本説一切有部毘奈耶雜事』

の物語をもとに上引の説の唱えたのであれば、実に興味深いのであるが。

さて、話を戻すと、*Wat Pā Dāng* 派の僧たちが重要視していたであろう *Kacc.1* が、仏弟子または後世の文法家の考えにより説かれたものではなく、釈尊の口誦による直説ということになれば、パーリ語の字音体系を紊乱してはならないとする彼らの思想を支える柱はより強靱なものとなるであろうし、その主張の仏教的な正当性や権威が高まることであろう。当該の1文を書いた人物が、*Chappada* の著作の中に *KSN* のあることを知っていて、しかも *Wat Pā Dāng* 派がこれを特段に重要視していたのであれば、*Chappada* の著述活動を称揚する理由に十分なりえるであろう。(※余談であるが、A.D.1726年のSVのnissayaには、字音の一々は仏像と同等でありうると述べられている。Cf.MSS-B, p.127)。

Jkm 第24章 “*Mahādhātucetiya-kathā*” [*Jkm*, pp.95-96 ; Cf. *Jkm-tr*[J/E], pp.133-136] の語り⁽²⁰⁾ というのは、筆者が言うところの *Wat Pā Dāng* 派の「確立期」(C.S.803~813年 = A.D.1441/42~1451/52年、Cf. 古山2022. Pp.231ff.) のうち、その始まりの頃の時期の出来事を語っている章である。前王サムファンケン王の時代に、パーリ語の字音 (*akkhara*) の矯正を目指してスリランカに留学をし、チエンマイに帰ったラーン・ナー僧たちであったが、そのサムファンケン王にはほとんど顧みられず外護も受けられなかったようである [Cf. 古山2021.; 古山2022.]. しかしながら、国王が代替わりすると、新王ティローカラートからは敬重と手厚い外護を受けるようになった [Cf. 古山2022.]. このように彼らがようやく日の目を見ることになり始めた頃の出来事を語っているのが *Jkm* 第24章である。“*Mahādhātucetiya-kathā*” との章題が付されているが、*Mahādhātucetiya* それ自体のことを語ることを主目的としているのではなく、*Mahādhātucetiya* にまつわる彼らの「栄光」の始まりを語ることが、むしろ本章の主題であると言える。このように *Wat Pā Dāng* 派が国王の大きな崇敬を受けて、社会的な存在感を高め、僧派らしさを強めつつある「確立期」のまさにその時期に、奇しくも *Chappada* の著作活動が展開され、その中で、*Kacc.1* が釈尊所説であると説く、彼らの思想面に大きな裏打ちを与えうるところの *KSN* が著されたのであれば、同派の僧たちと *Chappada* との間に接点はなかったとしても、その「栄光」の始まりの語りにおいて、外せない出来事として、これに言及した、と想像できなくもないであろう。

ただし、*Jkm* の現存テキストを見る限り、そこではSVにしか言及していないので、*Jkm* を著した人が *KSN* のことを実際に意識していたのかどうかは分か

らない。Wat Pā Dāng 派の思想と KSN との関係を実証するには Jkm 以外のものに目を向けなければならないが、目下の筆者には何らの用意もできていない。

Wat Pā Dāng 派の僧が Chappada に言及する理由は、すべて想像の域を出ないものではあるが、上述したように相応に考えることはできる。そしてほかにも考えることができるであろう。ゆえに、この 1 文が理由もなく語りの糸を遮断して無関係な話を差し込んでいると断じ切れるのかということ、必ずしもそうではないように思う。

5. むすび

Jkm 第24章の 1 文が、理由もなく語りの糸を遮断しているとは言い切れず、年代の合わない不合理な話をしているのでもないとするれば、当該の 1 文を〔後世の〕竄入と断ずるためには、筆者 (古山) が上述したところを破斥した上で、さらに別の決定的な理由が示されねばならないであろう。それが示されないうちは、もはや Jkm の原初のテキストを見ることができないので竄入説の可能性がゼロであるとまでは言えないまでも、当該の 1 文がもともと書かれてあったと考えることは決して無理なことではない。

Cœdès の時代においては、SV を著した Chappada をカルヤーニー碑文に登場する A.D.12c の僧としか考えることができなかつたのかもしれない。しかしながら、Buddhadatta や Godakumbura の所論が世に出て「Chappada 二人説」が確実となったと言える状況においては、Chappada を A.D.12c の僧と見做すことしかししない考えには盲従すべきではない。Cœdès がいくら東南アジア史の領域で世界第一の碩学⁽²¹⁾であったとしても、例えば Hans Penth の *Jinakālamāli Index* ように、Cœdès の竄入説を単純に踏襲するだけでは、当該の 1 文に新たな理解を切り開きうる可能性があっても、これを無にしてしまうことになる。結果、Jkm や Wat Pā Dāng 派に対する我々の理解は、相変わらず 100 年前のままである。識者の批判を乞う。

本稿に使用した略記

BEFEO: *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*

JBRS: *The Journal of the Burma Research Society*

JPTS : *Journal of the Pali Text Society*

JSS : *The Journal of the Siam Society*

PTS : *The Pali Text Society*

参考・参考文献と略号

- Ruiz-Falqués2015. : Aleix Ruiz-Falqués, 'The Creative Erudition of Chapaḷa Saddhammajotipāla, a 15th-Century Grammarian and Philosopher from Burma' *Journal of Indian Philosophy* vol. 43, No. 4/5, Special Issue on the Reuse of Texts in Indian Philosophy, Part 2 (2015) , pp.389-426
- Buddhadatta1951. : Ambalangoda Polwatte Buddhaddatta, 'Were There Two Elders by the name of Chappada?' *University of Ceylon Review* vol. IX, 1 (1951) : pp.69-75
- Godakumbura1969. : Charles Edmund Godakumbura, 'Chapada and Chapada Saddhammajotipāla.' *JBRSL* LII, 1 (1969) : pp.1-7
- GPL. : Asha Das, *The Glimpses of Pali Literature (Gandhavaṃsa)* . Culcutta; Punthi Pustak, 2000.
- Hazra1994. : Kanai Lal Hazra, *Pāli Language and Literature: A Systematic Survey and Historical Study, Vol.II Literature: Non-canonical Pāli Text*, New Delhi; D.K. Printworld (P) Ltd., 1994.
- Hazra2002. : Kanai Lal Hazra, *The Buddhist Annals and Chronicles of South-East Asia*, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt, Ltd., 2002.
- Hinüber1996. : Oskar von Hinüber, *A Handbook of Pāli Literature*. Berlin: Walter de Gruyter & Co, 1996.
- Jayawardhana1994. : Somapala Jayawardhana, *Handbook of Pali Literature*. Colombo; Karunaratne & Sons Ltd, 1994 .
- Jkm. : Ambalangoda Polwatte Buddhaddatta, ed, *Jinakālamāli*. London: PTS, 1962.
- Jkm-Ind. : Hans Penth, *Jinakālamāli Index, An Annotated Index to The Thailand Part of Ratanapañña's Chronicle Jinakālamāli*. Chiang Mai: PTS & Silkworm Books, 1994.
- Jkm-tr[C/P]. : George Cœdès, 'Jinakālamālinī (Texte) .' *BEFEO* 25 (1925) : pp.36-72
- Jkm-tr[C/F]. : George Cœdès, 'Jinakālamālinī (Traduction) .' *BEFEO* 25 (1925) : pp.73-149
- Jkm-tr[J/E]. : Ratanapañña Thera, *The Sheaf of Garlands of the Epochs of the Conqueror, Being a Translation of Jinakālamālipakaraṇaṃ*. 1968. Trans. N.A.Jayawickrama, London:PTS, 1978 (Rep.) .
- Jkm-tr[S/T]. : ชินกาลมาลีปกรณ์. Trans. ร.ต.ท. แสง มนวิฑูร เจริญชัย, Chiang Rai: กรมศิลปากร, B.E.2501.
- Jkm-tr[W/T]. : พระรัตนปัญญา. ชินกาลมาลีปกรณ์, B.E.2451, Trans. พระยาพจนานุกรม, Nonthaburi : สำนักพิมพ์ศรีปัญญา, B.E.2554. (Rep.)

- Kalyani-Isc. : Taw Sein Ko, *The Kalyānī Inscriptions Erected by King Dhammaceti at Pegu in 1476 A.D., Text and Translation*, Rangoon: The Superintendent, Government Printing, Burma, 1982.
- Kacc-nidd. : The Ven'ble Neruttikachariya Chhappada Maha Thera, *The Kachchayanasuttaniddesa*. Ed. The Rev. Mabopitiye Medhankara Bhikkhu, Colombo: Vidyabhusana Press, 1915.
- KT-Isc.:A,B,Griswold & Prasert ṇa Nagara, 'An Inscription from Keng Tung (1451 A.D.) . ' JSS 66.1 (1978) : pp.66-88
- MSS-B. : *Burmese Manuscripts Part I, Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland, Im Einvernehmen Mit Der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft Herausgegeben Von Wolfgang Voigt Band XXIII, 1*. Compiles by Heinz Bechert, Daw Khin Khin Su and Daw Tin Tin Myint, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GmbH, 1979
- MSS-IOL. : Hermann Oldenberg, 'Catalogue of the Pali Manuscripts in the India Office Library.' JPTS 1882: pp.59-128
- MSS-MDL. : Michael Viggo Fausbøll, 'Catalogue of the Mandalay MSS.in the India Office Library (Formerly Part of the King's Library at Mandalay) . 'JPTS 1894-1896: pp.1-52
- MS[CP/E]. : Sommai Premchit & Donald K. Swearer, 'A Translation of Tamnān Mūlasāsanā Wat Pā Daeng: The Chronicle of the Founding of Buddhism of the Wat Pā Daeng Tradition.' JSS 65.2 (1977) : pp.73-110
- MS[CP/T]. : *Tamnan-Mulasasana, Transliteration Series IX*. Trans. Sommai Premchit & Puangkam Tuikheo, Chiang Mai: Chiangmai University, 1976.
- Norman1983. : Kenneth Roy Norman, *Pāli literature, Including the Canonical Literature in Prakrit and Sanskrit of all the Hinayāna Schools of Buddhism*. A History of Indian Literature, vol.vii, 2. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1983.
- Penth2004. : Hans Penth, *A Brief History of Lan Na, Northern Thailand from Past to Present*. Chiang Mai: Silkworm Books, 2004.
- Pind1995. : Ole Holten Pind, 'Pāli and the Pāli Grammarians: The Methodology of Pāli Grammarians.' *Sauhrdyamangalam Studies in Honour of Siegfried Leinhard on His 70th Birthday*. Ed. Mirja Juntunen[et al], William L. Smith and Carl Suneson, Stockholm: Association of Oriental Studies, 1995. pp.281-297
- Piṭaka. : မင်းကြီးမဟာသိရီဇေယသျှ, ပိဋကတ်သုံးစာတမ်း ခေါ် ပိဋကတ်တော်သမိုင်း, Yangon: ရာပြည့်, စာအုပ်တိုက်, 2002 (6th ed.) .
- Piṭaka-Tr. : Mañ:-krī: Mahāsiriyeja-sū. *Catalogue of the Piṭaka and Other Texts in Pāli, Pāli-*

- Burmese, and Burmese (Piṭakat-to-sa-muiṇ:)*. Summarized and Annotated Translation by Peter Nyunt. Bristol: The Pali Text Society, 2012.
- PLB. : M.H.Bode. *The Pali Literature of Burma*. Rangoon : Burma Research Society, 1965.
- PTCS. : Peter Skilling & Santi Pakdeekham, *Pāli Literature Transmitted Central Siam*. Bangkok: Fragile Palm Leaves Foundation, Lumbini International Research Institute, 2002.
- PVTCN. : Peter Skilling & Santi Pakdeekham, *Pāli and Vernacular Literature Transmitted Central and Northern Siam*. Bangkok; Fragile Palm Leaves Foundation, Lumbini International Research Institute, 2004.
- Sās. : Mabel Bode, ed. *Sāsanavaṃsa*. Oxford : The Pali Text Society, 1996 (Rep.)
- Sāslc. : မဟာဓမ္မသုကြို, သာသနာ့ဝန်ကြီးဌာန. Yangon: ဗမာ့ဝန်ထမ်းပို့ဆောင်ရေးဦးစီးဌာန, 1956.
- 生野1980. : 生野善應『ビルマ上座部仏教史』、山喜房佛書林、1980年
- 池田2007. : 池田正隆『ミャンマー上座部仏教史伝 『タータナー・リンガーヤ・サーダン』を読む』、法蔵館、2007年
- 片山1974. : 片山一良『『パーリ語文献史』和訳・索引 (GANDHAVAMSA)』『佛教研究』第4号、1974年
- 橘堂1997. : 橘堂正弘『スリランカのパーリ語文献』、山喜房佛書林、1997年
- 佐々木1979. : 佐々木教悟「タイ仏教における業思想」『業思想研究』、平楽寺書店、1979年
- 古山2017. : 古山健一「*Jinakālamāli* について 一特に1つの難句をめぐって一」『駒澤大学仏教学部論集』第48号 (2017年10月)
- 古山2019. : 古山健一「Wat Pā Dāng 派の成立に関する小考」『駒澤大学仏教学部論集』第50号 (2019年10月)
- 古山2020. : 古山健一「Wat Pā Dāng 派の成立に関する小考 (2)」『駒澤大学仏教学部論集』第51号 (2020年12月)
- 古山2021. : 古山健一「Wat Pā Dāng 派の成立に関する小考 (3)」『駒澤大学仏教学部論集』第52号 (2021年10月)
- 古山2022. : 古山健一「Wat Pā Dāng 派の成立に関する小考 (4)」『駒澤大学仏教学部論集』第53号 (2022年10月)
- 渡邊2018. : 渡邊要一郎「Saddanītiにおける文法学の位置づけ」『インド哲学仏教学研究』第26号 (2018年3月)
- 渡邊2019. : 渡邊要一郎「Is Kacc 1: *attho akkharasaññāto a pubbavākyā?*」『印度學仏教学研究』第67卷〔3〕(2019年3月) ※英文論文

註

- (1) 以前の拙稿 [古山2021.] の中でも述べているが、Wat Pā Dāng (ワット・パーデー) 派とは、同派の伝承によれば、A.D.15c前半のラーン・ナー王国サムファンケン王の治世期に出現した新しい僧派である。同派内で編述されたJkm及びMS.CPの語るところによると、サムファンケン王の時代に、先行のスリランカ系僧派であるWat Suan Dòk (ワット・スワンドーク) 派内での僧団儀式の朗誦等におけるパーリ語の“*orthoepy*”が問題視されたようであり、「パーリ語改革」の必要性を感じる比丘らが現れた (※詳しくは古山2019.の第2節及び古山2021.の第3節を参照されたい)。そして、“Mahādharmagambhīra” (Jkm) または“Mahāñāṅagambhīra” (MS.CP) という名の比丘を中心とした僧のグループは、スリランカに留学して授具足戒式を受け直すとともに、当時のスリランカにおけるパーリ語の“*akkhara-paveṇi*” (文字体系の慣用) と、これに沿った“*pada-bhāṇa*” (誦) 及び“*sara-bhāṇa*” (誦) を学んでチエンマイに戻り、その流儀による僧団儀式を執行し始めた。このことによって生まれたのがWat Pā Dāng派である。サムファンケン王の治世期は国王の援助もなく教勢は振るわなかったが、次代のティローカール王の時代に国王との関係が俄かに濃密となり、その外護を受けて王室御用僧団の如き様相を呈するようになった (※詳しくは古山2022.を参照されたい)。なお、Wat Suan Dòk派とは、A.D.14c後半期のクナー王の治世期に、Sumana長老がスコタイ王国からチエンマイへ招聘されたことを契機に、同師が住まったチエンマイのWat Suan Dòkを拠点として形成された僧派である。Sumana長老の師匠であり、ミャンマー南部地域にいた、Udumbara師が、スリランカ仏教の伝持者であると考えられることから、Wat Suan Dòk派もスリランカ系僧派と見做されており、Wat Pā Dāng派とともに、タイ語で「ランカーウォン (*ลำปาง* < Skt. Laṅkāvaṃśa) 」と呼び名され、また現代の欧米の学者らによっては“*Sinhalese school*” という概念で括られている。このようにしてA.D.15cのラーン・ナー仏教には2つの“*Sinhalese school*” と呼ぶ僧派が並び立ったのであるが、両派に同じ呼称を与えただけでは混乱を来すので、区別がつく呼称にして各々を呼ぶようにしている。Hans Penthは、Wat Suan Dòk派を“*the old or first Sinhalese school*” とし、Wat Pā Dāng派については“*new, later or second Sinhalese school*” と述べている [Penth2004.p.74ff.]。古山2019.でも述べるように、Wat Pā Dāng派は、自派には“*Sīhaḷa-saṅgha*”や“*Sīhaḷa-gaṇa*”、“*Sīhaḷavaṃsika*”といった呼称を与えているが、Wat Suan Dòk派にそうすることは決してない (※Jkmでの語り)。自らこそがスリランカ仏教の真つ当な伝承者であるとの気負いが強く、Wat Suan Dòk派を“*Sinhalese school*”とは認めない立場に立っている。また、古山2019.と古山2020.で述べているように、Wat Suan Dòk派の僧団儀式には、まったく無効となりかねないような不審な点があるとの見方を懐

いている (※MS,CPでの語り)。Wat Suan Dòk 派への批判意識や対抗心が強く、「Wat Pā Dāng 派は頑固で傲慢な傾向があり Wat Suan Dòk 派を公然と批判する」と評されている [KT-Isc. p.67]。

- (2) *Jinakālamāli* (Jkm) については古山2017,を参照されたい。
- (3) この“Mahādhātu-cetiya”については、チエンマイの Wat Jedī Luang の仏舍利塔を指すとする解釈があるが [Cf. Jkm-tr[J/E]. p.135 *footnote*5]、Hans Penth はラムプーン の Wat Phra Thāt Hariphunchahi のそれと考えている [Jkm-Ind. pp.252-253]。
- (4) PTS 本文文: Tasmim̐ yeva Sakkarāje Arimaddanapuramhi Chappadācariyo Saṅkhepavaṇṇanaṃ akāsi.
- (5) 原文 : Le texte ajoute ici : << Cette année-là, Chappadacariya composa la Sankhepavannana à Arimaddanapura.>> Cette phrase est une interpolation manifeste, car elle interrompt sans raison le fil du récit pour y introduire une absurdité. Le célèbre Chapada vivait plusieurs siècles avant les événements rapportés ici.
- (6) 池田2007.では、引用部分について、〈ウッターラジーワ大長老とサッパダ [沙弥] がセイロンへ渡ったのは、仏暦1715 (1171) 年、サッパダ [長老] がセイロンから帰ってきたのが仏暦1725 (1181) 年。このようにキャリアニー碑文、王統史などに出ています。／『経義釈 *Suttaniddesa*』、『略疏 *Saṅkhepavaṇṇanā*』など、先述の書物の奥付けには、『*Puṇṇedase-
navanavutiguṇecavasse, vassesahassagaṇanejinanibbutambhā* [仏滅後 1810 (1266) 年] と [あり]、セイロンへの渡航と到着という 2 つ [のことも] あるので、それらに応じてよく考えて理解検討すべきです) との和訳を与えている。
- (7) “navanavutiguṇe ca vasse” における “ca” を “cha” とするテキストもあるようである [Cf. Godakumbura1969. p.3; Ruiz-Falqués2015. pp.4-5]。これによれば「1996年」となる。
- (8) 池田2007.は、〈～あるので、それらに応じてよく考えて理解検討すべきです) との訳文に、〈…これらの書物の奥付けにあった年時は、さらに後年付加されたものであることを示している。別人の可能性が高い。よく検討してみなさい、といているわけである〉 (p.191 註 (6) との註記を付している。そもそも原文の “*နိဝုဒ္ဓိသုဒ္ဓိဗ္ဗိတိဝိသေသံ ခရစ်လောကုနံ*” の訳として 〈～あるので、それらに応じてよく考えて理解検討すべきです) というのは適切ではないように思うので、これに付した解釈説明の註記が正鵠を得ているのか疑問であり、Sāslc が奥付を後代の付加と考えているのかどうかは定かではない。
- (9) カルヤーニー碑文に登場する “Chapata” がこの名で呼ばれることになった所以は、同碑文の述べるところによれば、〈Kusima 王国にある Chapata と名付けられた村の住人の子であったから〉 [Kalyani-Isc. p.4] とのことである。Sāslc の語りはこの碑文が情報源であると見

て間違いなからう。

- (10) A.D.1980年に出版された生野1980.の註記には、〈Saddhammajotipāla. 諸書の著者サバダはシーハラ僧伽の設立者のサバダとは別人であり、一説によると、バラッカマバーフ六世 (Parakkamabahu VI, 1410-1468) 時代にセイロンに渡り、当地において仏教を講じたビルマ僧という。シーハラ僧伽設立者サバダに著書はない (もしあったとすればカルヤーニー碑文に記されもよい) (シーラナンダ師説明) …〉 (p.157註 (11)) と述べられている。
- (11) 筆者はこの Buddhadatta の論文をスリランカ・ペラデニヤ大学のデジタルライブラリーから入手した (<http://dlib.pdn.ac.lk/handle/123456789/1022>)。同サイトには、この論文の “Issue Date” は “1951”、 “Citation” は “University of Ceylon Review vol. IX, 1951 Jan No. 1, pp 69-75” と記されていた。
- (12) Buddhadatta1951.に引かれている原文は以下のとおり (p.71)。
1. Puṇṇe dase navanavutiguṇe ca vasse/ vasse saḥassaguṇe jinanibbutimhā/
iddhārimaddanapurā vara-Tambapaṇṇim/ patvāna yo Siriparakkamabāhubhūpaṃ/
 2. Nissāya sāsanaṃalam suvisodhayitvā/ bhikkhūhi ciṇṇavinayehi susaṅgātehi/
bandhāpayī puravare Jayavaḍḍanave/ sīmaṃ vipattirahitaṃ vinayanurūpaṃ/
 3. Sikkhāpayī yatiguṇe vinayābhidhamme/ paṅṅāvadātahadayo sadayo janānaṃ/
appicchatā--virīya-sīla-guṇappasattho/ saddhādhano sakalasisa-janānukampī/
 4. Sabbatthayutta-piṭakattaya-parādassī / so Chappadavhayasuto yati rājakanto
nānānaṃ paramasaṅgahavaṇṇanaṃ/ saṅkhepatō viracayī munisāsanattham.
- (13) Buddhadatta1951.に引かれている原文は以下のとおり (p.72; Cf. MSS-MDL. p.39; MSS-B. p.41)。
- Arimaddana-nagara-gocaragāmakena ... Laṅkādīpa-paradīpavāsīnaṃ sotujanānaṃ pariyattim pariyāpuṇantena, Chappado ti visuttana ... tiṭṭakadhara-garūhi gahita-Saddhammajotipālo ti nāmavhayena therena katā Abhidhammattha-saṅgaha-saṅkhepavaṇṇanā niṭṭhitā.
- (14) Buddhadatta1951.に引かれている原文は以下のとおり (p.73; Cf. MSS-IOL. p.85; MSS-B. p.41)
- Āgatāgamasatthena cando va saradambare/ pākaṭen'īdha dīpamhi Mahāvījayabāhunā/
Ukkuṭikaṃ nisīditvā sāsanaṭṭhābhikaṅkhinā/ yācito'haṃ karissāmi Saṅkhepapada-vaṇṇanaṃ.
- (15) KSNの序偈には、その著述動機として、正法久住を願う “Dhammacārin” なる人物によって要請されたことが述べられている [Kacc-nidd. p.1]。Gandhavamsaでは、この人物のことを Saddhammajotipālaの弟子 (sissa) であると述べている [GPL.p.35; Cf. 片山1974. p.113] が、真偽のほどは分からない。Jkmでは、DhammagambhīraたちがC.S.786年 (A.D.1424年)

にスリランカのカルヤーニー・ヤーパー港において授具足戒式の執行を受けた際の和尚として Dhammacārin 法師の名が見える [Jkm. p.93; Cf. 古山2019. p.266]。この法師と A.D. 1447年頃に KSN の述作を要請した人物については、別人かもしれないが、その同否について 1 度は考察を加えてみる価値があるように思う。

(16) ここに挙げられている 4 書であるが、*Rūpasaddā* は *Rūpasiddhi*、*Nayāddhasaddā* は *Ñyāsa* (*Mukhamattadīpanī*) を指し、*Samuhanikhādahasaddā* は次註に述べる *Nikhādanasaddā* と同一ではないか、と考えている、*Bhedaniruttisaddā* については、いくつか可能性が考えられるが、目下のところよく分からない。このように、これら 4 書のうち 3 書は KV 系統の文法書と思われる。

(17) ここに挙げられている 4 書、すなわち *Saddāsandhi*、*Nikhādanasaddā*、*Cintāmaṇī*、*Vuttisaddā* については、その詳細は分からない。ただし、*Saddāsandhi* はその書名からしてパーリ語の連声規則を述べる文法書であることが察せられる (KV の第 1 章 *Sandhi-kappa* のみを抄出したものか?)。また、*Nikhādanasaddā* は、*Mūlakaccāyana* (SV の *sutta* の部分) の註釈書とされる *Nikkhādanti* [Cf. PVTGN. p.310 No.16.30] のことかもしれない。*Vuttisaddā* は、*Kaccāyana-vutti* を指すのではないかと推察する。*Cintāmaṇī* は分からない。これら 4 書のうち 3 書は KV 系統の文法書かと思われる。

(18) *Kacc.1* “*attho akkharasaññāto* (意味は字音により知覚される)” に対して、その “*vutti*” の箇所では、〈すべての言葉の意味 (*attha*) は、諸々の字音 (*akkhara*) によってのみ知覚される。なぜなら、字音の失壞において、意味の難導性 (*dunnayatā*) が生じるからである。それゆえ、字音に巧みであることは、諸々の經典において多大な資助となるのである〉と説明されている。

(19) 『根本説一切有部毘奈耶雜事』の物語によると、ある比丘が〈若人寿百歳、不見水白鶴、不如一日生、得見水白鶴〉との頌を唱えていたのを、阿難尊者が釈尊はこのような言葉を説いてはいないと咎め、正しくは〈若人寿百歳、不了於生滅、不如一日生、得了於生滅〉であると正した、と言う。恐らくは根本説一切有部の僧院内において起きたであろう、サンスクリット語で釈尊の言葉を伝持する比丘がインドの地域語でこれを伝持する比丘を咎めたという出来事をもとに作られたのが、この物語かと考えられる。この頌の原文に相当すると考えられるサンスクリットの *Udānavarga* 24.6 には、その第 2 詩脚と第 4 詩脚に “*udaya-vyaya*” とあるが、ガンダーラ語 *Dharmapada* における対応箇所を見ると “*udaka-vaya*” とあり、“*udaya*” は “*udaka*” となっている (Cf. 水野弘元「法句經対照表」『佛教研究』(国際協会) 第 3 号 (1973 年 8 月) pp.145-144)。このことから推察するに、ある比丘が唱えた頌というのは、ガンダーラ語などインドの地域語や、その影響を受けて訛ったサンス

クリット語の語形で伝承されたものと思われる。ある比丘が憶持していた頌においては、サンスクリットの“udaya”に相当する語は“udaka”で、同じく“vyaya”に相当する語は“baka”であったのであろう。地域語の經典を憶持していたこの比丘にとって“udaka-baka”は「生滅」を意味する言葉であったのであろうが、この語をサンスクリット語として見ると「水白鶴」や「水白鷺」といった、まったく異なる意味になってしまう。阿難尊者は〈汝所誦者、大師不作是語。然仏世尊作如是説〉と述べ、この比丘を咎めた。「顛倒解」として批判もしている。地域語の語形をサンスクリットのそれと見做して咎めるところには理不尽さがあるが、かつて根本説一切有部ではサンスクリット語による仏語の伝持を重んじて、地域語のそれにはかなり批判的であったのであろう。

- (20) Jkm第24章の語りは、①ティローカラート王の即位 (C.S.803年)、②初めてのラーン・ナー国王支援による授具足戒式の執行 (C.S.803-806年)、③Mahādhātu-cetiyaの工事開始→仏塔基壇工事 (C.S.809年)、④Wat Pā Dāng派の僧長 (mahāsāmi) である Medhañkaraが同工事の吉祥バリ儀礼を執行 (C.S.809年)、⑤仏塔本体の改修・拡張工事 (C.S.809-810年)、⑥仏塔守護壁建設 (C.S.810年)、⑦ChappadaによるSVの述作 (C.S.810年)、⑧仏塔漆喰工事、Medhañkaraへの灌頂と諡号授与 (C.S.809年)、⑨Mahādhātucetiyaにおける大祭礼 (?年)、⑩Mahādhātucetiyaへの金箔・金板による莊嚴 (?年)、によって構成されている。
- (21) ジョルジュ・セデス著、辛島昇・桜井由躬雄・内田昌子共訳『インドシナ文明史』、みすず書房、1980年 (新版第1刷) p.335 (※山本達郎「セデス教授の業績」)

〈キーワード〉 Wat Pā Dāng 派、*Jinakālamālī*、Chappada、*Saṅkhepavaṇṇanā*、*Kaccāyanasuttaniddesa*